立体（活字）

context in the text

せいたい
正体

斜体 [Oblique]

*context in the text*

*context in the text*

イタリック [Italic]

Glassy Glossy Logo Type

虚ろなロゴタイプ

昨今のロゴタイプといえば、CELINE( アクサンの消失 ) あたりから次々と浸食し始めたサンセリフ + ボールドの波であることに疑いの余地はない。BURBERRY も Acne も COS も気づけばみんなボールドなサンセリフに変わっていた。アイデンティティの根幹であるはずのロゴ（タイプ）すら時流に合わせて変容する「軽やかさ」こそが現代的？サンセリフボールド族に帰属したい欲求とは？

一方で、ニッチ市場ではあるものの、セリフ体もにわかに目にする機会が増えた。特に気になるのが波打つように歪んだセリフのロゴタイプだ。飽和状態のサンセリフにそろそろ逆張りしておきたくなるのは必然だろう。集団の像を認識できたら、そこを基準点としてズラす。マーケティングの一般的な手法だ。しかし、ひと昔前の細いサンセリフ（ex.Helvetica Ultra Light）から、ボールドなゴシック、そして歪んだセリフ体へと、フォントのトレンドを回顧してみると、そのフォントを欲する潜在的な集団心理が気になる。

フォントは日本語では「体」という字で表現される。ゴシック体､明朝体、斜体…etc（font の語源はラテン語の funditus で「注入 , 鋳造」という意味らしい）人間の使う道具としての『体』。身体の延長と思わずにいられない。

歪みのないノーマルなフォントは「正体（せいたい）」と呼ばれる。活版印刷の用語として、版に入れる文字が立っていることから文字通り「立体」と表記されることもあるらしい。文字が物質として扱われているようで面白い。「正体（せいたい）」の対は「斜体」。「斜体」は、文中で強調したい語、タイトルなど他の要素と区別したい時などに用いられる。「正体（しょうたい）」ともし読むとしたらその対は「虚像」や「仮面」となるようだ。つまり、斜体と虚像や仮面は近似している？

そうだとしたら、斜体からさらに複雑に歪んだフォントとは？複雑な凹面をもったレンズを透過し、発散していく光線のように、実用も虚像も、もはや捉えることは不可能というか、明確な輪郭をもった像として認識されることを拒んでいるというか、そもそも仮面の姿で見られることしか望んでいないのかもしれない。そういう欲求の兆しなのではないだろうか？ 2021 年トレンドのフォントとして中抜き文字もその一形態としてピックアップされていた。

text　極細サンセリフ：周辺に溶け込み目立たないように。

**text**　ボールドサンセリフ：自己主張。ユニバーサルでグローバル。

text　（あえてのセリフ：差別化。エクスクルーシブ。）

*text*　歪形セリフ：？？？

しょうたい
正体

虚像
仮面

（－）x（－）＝（＋）

Cancell!!

*context in* the text

イタリックの中のイタリック＝正体

- 強調したい語
- タイトル中のタイトルなど
- 生物学における学名のうち、属名以下（種名・種小名など）は、地の文と区別するためにイタリック体で表記し、それ以外（科以上の階級）は立体を用いる。